

石切場跡発掘調査報告書

—徳川大坂城再築工事関連の石切場跡調査—

2012年11月

大東市教育委員会

序 文

天正 11 年 (1583) 9 月 1 日、京都吉田神社の神官、吉田兼見という人物が河内方面を経由して堺から京へ帰る途中、彼が目にしたのは河内飯盛山の周辺に、大坂城築城に使う石を探るため、人足や奉行人が大勢行き交っている様子で、彼は日記にそのことを書き留めています。この日はちょうど、豊臣秀吉の大坂城築城が始まったとされている日で、彼は偶然にもその光景に遭遇したのでした。

秀吉が天下に大号令を発し築いた大坂城、今は大阪の観光名所として、或いは市民の憩いの場として、大勢の人が訪れています。しかし、ご存知でしょうか。現在我々が目にする豪壮な石垣や堀などの懸構は、徳川時代に再築されたものであることを。天守閣に至っては昭和に入ってから復興されたものです。

大坂城の再築工事は、元和 6 年 (1620) の 2 代将軍徳川秀忠の時に始まります。天下普請で行われたこの工事は、石垣の工事箇所を諸藩に分担させるもので、このため、諸藩は各地に石材を求め、石を切り出し、大坂城へと運びました。石材の産地としては、瀬戸内海の島々、六甲山系、笠置山系が知られ、生駒山系も秀吉の頃から主要な石材の供給地となっていました。生駒山系にある大東市龍間地域でも、石を切り出すために穿たれた矢穴が残る石や、諸藩固有の印が刻まれた石が所在し、徳川大坂城再築時に石が切り出されていたことが知られていました。

本報告は、龍間に所在するゴルフ場の改修工事等に伴う発掘調査の報告で、調査の結果、矢穴の残る石や、「西足立」等の文字が刻まれた石柱列が発見されました。矢穴は徳川大坂城再築時のもので、その石切場であったことが確認され、また「足立」は、織田信長に仕え、豊臣、徳川の時代には、大坂城築城の石の切り出しに深く関与していた、善根寺の足立家のことと、石柱はその領地を示す境界石であることがわかりました。

また、今回の調査は、生駒山系において徳川大坂城再築時の石切場跡の発掘調査が実施された初めての事例で、その意味においても貴重な発見であったと考えています。徳川期の石切場跡の調査・研究については、早くから調査が実施されている小豆島や六甲山系（芦屋）が先行していますが、今回の調査を嚆矢として、生駒山系での研究が進展することを期待します。

最後になりましたが、本調査にご協力いただいた、阪奈土地建設株式会社を始め、関係各位に対しまして、感謝の意を表します。

平成 24 年 11 月 30 日

大東市教育委員会

教育長 亀岡 治義

例 言

1. 本書は大東市龍間所在、石切場跡の発掘調査報告書である。
 2. 調査は阪奈土地建設株式会社の依頼を受け、大東市教育委員会が実施した。
 3. 本書に掲載している調査名と調査期間は下記の通りである。

T S Q 90-1(阪奈カントリーゴルフ場改修工事に伴う)

平成2年(1990)10月15日～11月2日(その1)・11月5日～12月5日(その2)

TSQ 92-1(スポーツヒルズ大阪新設工事に伴う)

平成4年(1992)3月19日～5月15日

4. 調査に要した費用はすべて阪奈土地建設株式会社が負担した。記して感謝の意を表する次第である。
 5. 調査は大東市教育委員会生涯学習課（調査当時は歴史民俗資料館）黒田淳が担当し、調査及び整理作業には、以下の者が従事した。大谷聰、大山清、野村香枝、井尻由美子、山田芳樹。
 6. 調査の実施及び本書の作成にあたっては、以下のの方々のご指導並びに助言を得た。（順不同）藤井重夫（築城史研究会）、樋口清春（龍間住友）、岡村喜史（大東市市史編纂委員）、森岡秀人（芦屋市教育委員会）、三宅正浩・亀島重則（大阪府教育委員会）、山田浩史（川西市教育委員会）、坂本俊（奈良大学博士課程）、李聖子（父野市教育委員会）、矢倉嘉人（海南市教育委員会）、吉田野々（八尾市教育委員会）、館邦典、松田正昭
 7. 本書の執筆・編集及び写真撮影は、担当者がを行い、挿図・写真図版作成・編集の一部を担当者の指導の下、株式会社地域文化財研究所が行った。
 8. 本書で使用している標高はT.P.（東京湾標準潮位）、方位はT.S.Q. 90-1 が磁北をT.S.Q. 92-1 が座標北を表している。

目 次

序 文

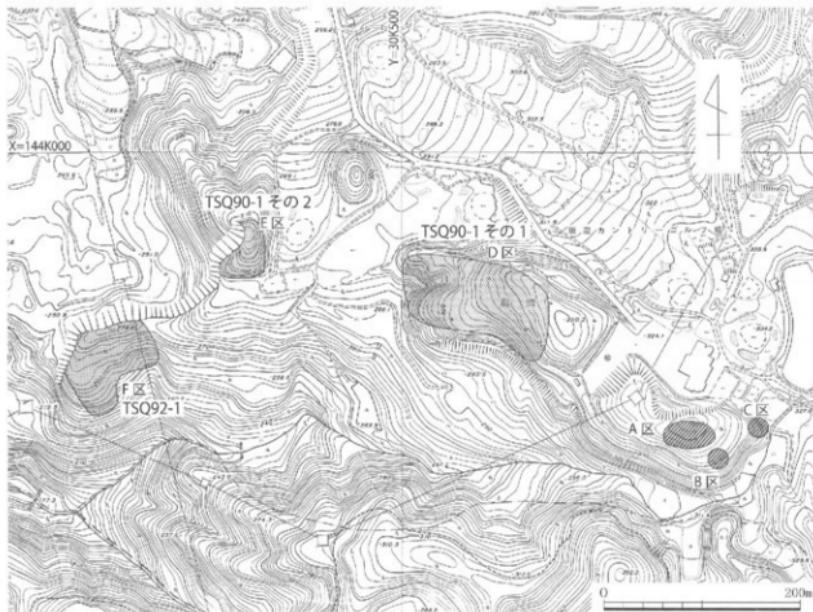
例 言

第1章 調査に至る経緯	1	
第2章 位置と環境	3	
第1節 地理的歴史的環境	3	
第2節 徳川大坂城再築と龍間	3	
第3節 刻印と矢穴について	3	
第3章 調査成果	4	
第1節 D区 (TSQ 90-1 その1) の調査	4	
第2節 E区 (TSQ 90-1 その2) の調査	7	
第3節 F区 (TSQ 92-1) の調査	8	
第4章 まとめ	9	
第5章 中垣内1丁目所在「大坂城残石」について	18	
図版目次		
図版一・二 TSQ 90-1 (D区)	図版十八	TSQ 90-1 出土遺物
図版三・四 TSQ 90-1 (E区)	図版十九	TSQ 92-1 出土遺物
図版五~十七 TSQ 92-1 (F区)	図版二十一	大坂城残石

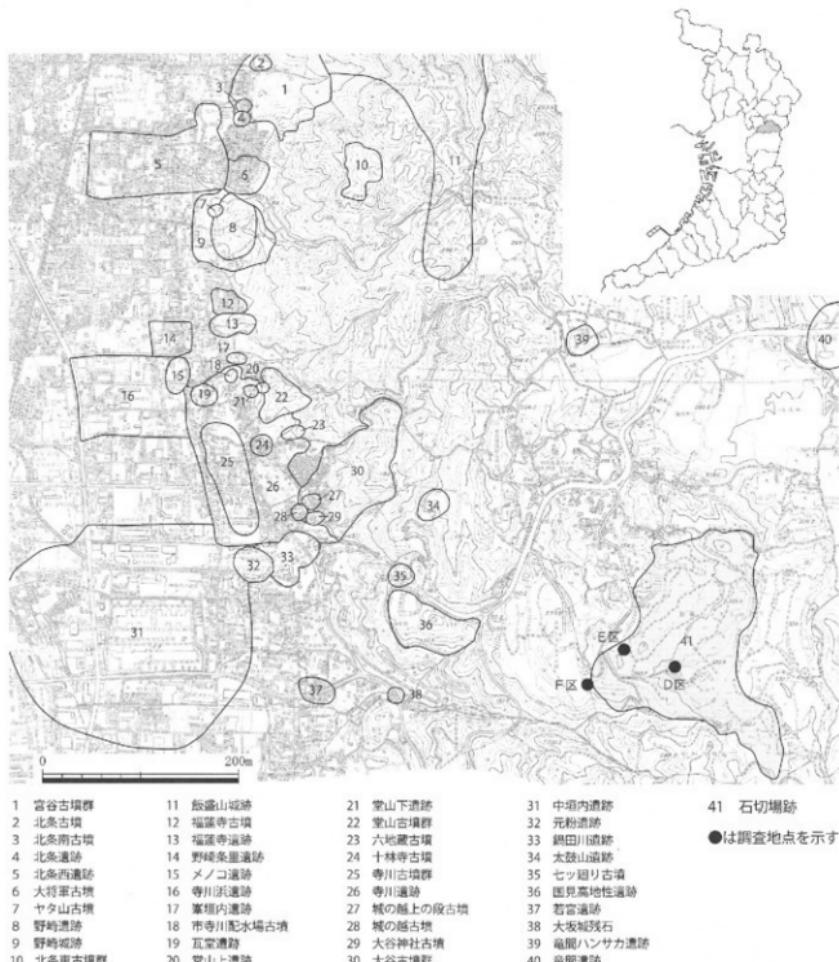
第1章 調査に至る経緯（第1図）

大東市龍間地域には、以前から元和6年（1620）に始まる徳川大坂城再築関連の石切場の存在が知られていた。それは、昭和58年（1983）に藤井重夫氏らの築城史研究会により、通称「車谷」において発見されたもので、工事を請け負った諸藩固有の符号を示す、「◎」や「○○」「#」の印が刻まれた石（以下：刻印石）や、石を割るために穿たれた矢穴が残る石（以下：矢穴石）が分布していることが確認されている^③。

昭和60年（1985）、同地域内のゴルフ場改修計画が阪奈土地建設株式会社より出され、大東市教育委員会（以下：市教委）では、計画面積約264,000m²を対象として、分布調査と試掘調査（トレーニング坑241箇所）を実施したところ、新たに矢穴石を確認した。市教委では、この結果に基づき遺跡発見の手続きを行い、周知の埋蔵文化財包蔵地「石切場跡」として登録し、また、矢穴石が集中する地点の取り扱いについて事業者と協議を行い、昭和62年（1987）に発掘調査を実施した（A～C区）。調査の結果、徳川大坂城再築当時のものではなかったが、主に近世末～近代の石切場であったことが判明している^④。続いて平成2年（1990）、本遺跡内において、同事業者から再度、ゴルフ場改修工事の計画が出された。工事面積は約354,184m²と広範囲のため、先ず現状把握のための分布調査を実施した。その結果、石切場と推定される、巨岩が露出している地点、斜面上に矢穴石が点在する地点、人為的な石積みや矢穴石が点在する地点を確認することができた。計画はそれらに大きな影響を及ぼす行為であったため、事業者と協議を行い、これらの地点を対象に発掘調査を実施した。（TSQ90-1：その1・その2）また、前年の平成元年（1989）に同事業者より、約185,590m²が対象となるスポーツ施設新設工事の計画が出



第1図 石切場跡調査区位置図 (S=1/5,000)



第2図 大東市位置図・遺跡分布図（東部）(S=1/5,000)

され、市教委で試掘調査を実施したが、この時には遺構・遺物は確認されなかった。ところが、平成2年（1990）、施設を拡張する（約8,603 m²の追加）変更計画が出され、追加部分を対象として分布調査を実施したところ、矢穴石や「足立」の文字が刻まれた石柱の存在を確認することができた。市教委ではその状況から、当該地が徳川再築時の石切場であった可能性が高いと判断し、大半が遺跡外であったこの追加部分について、石切場跡の範囲拡大として遺跡発見の手続きを行い、事業者との協議を経て、平成4年（1992）に発掘調査を実施した。（T S Q 92-1）

第2章 位置と環境

第1節 地理的歴史的環境（第2図）

大東市は大阪府の東部にあり、河内平野の中央部に位置する。市域の東半分は山地丘陵地で、市街地のすぐ背後には生駒山系の北端に位置する標高 314.3 m の飯盛山がある。生駒山系の主要岩は領家花崗岩類で構成されている。

石切場跡 [41] は本市龍間に所在する。龍間地域は生駒山系が北に向かって徐々に高度を下げた、標高 200 ~ 350 m の山間部に位置している。現在こそ、大阪と奈良を結ぶ阪奈道路が通り、開発が進んでいるとはいえ、谷あいに存在する集落と耕作地以外は山林となっている。

当地域での人間の活動の歴史は今のところ弥生時代中期頃まで遡ることができ、河内平野を見下ろす標高約 212 m の独立丘陵に位置する国見高地性遺跡 [36] では高杯、龍間遺跡 [40] からはサヌカイト製石小刀、龍間ハンサカ遺跡 [39] から磨製石剣がそれぞれ採集されている。古墳時代以降中世前半までの様相は明らかではないが、龍光寺にある延命地蔵⁽⁹⁾に「延徳二庚戌三月」(1490) の銘が刻まれていることから、遅くとも中世後半頃までは、集落が形成されていたと考えられる。それは当地域が、古くから中垣内越え、龍間越えとも呼称される、河内と大和を結ぶ街道筋にあたり、それとともに発達してきたことによるものであろう。戦国時代では、本遺跡の北方に位置する飯盛山に、一時、畿内支配に成功した三好長慶が居城とした飯盛山城跡 [11] が存在する。また、前述のように当地域では花崗岩が産出されることから、天正 11 年 (1583) に始まる、豊臣秀吉の大坂城築城の頃より、石垣に使用する石の採石が行われていたことで知られているが、徳川大坂城再築の際にも、採石が行われていたことを示す、刻印石、矢穴石が今も残っている⁽¹⁰⁾。なお、採石は近年まで行われていた。

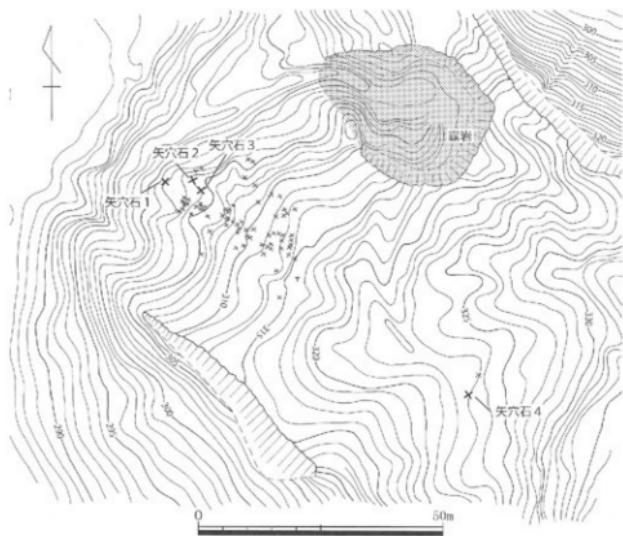
第2節 徳川大坂城再築と龍間

慶長 19 年 (1614) の大坂冬の陣、翌慶長 20 年 (1615) の大坂夏の陣により、豊臣氏は滅亡し、秀吉が築いた大坂城も灰燼に帰したが、徳川崩になっても、大坂の地理的重要度は変わりなく、元和 6 年 (1620)、2 代将軍徳川秀忠の時に大坂城再築工事が始まった。天下普請で行われたこの工事は、西国 35ヶ国の外様大名に請負わせたもので、工事は寛永 6 年 (1629) まで合計 3 回行われ、凡そ 10 年かけてようやく完成に至っている。工事を請負った諸藩は、各地から石垣に使用する石材を入手し、大坂城へ運んでいる。主な採石地として、香川県小豆島や岡山県牛窓町前島等の瀬戸内海の島々、六甲山系、京都笠置山系、そして生駒山系が知られていたが、生駒山系だけがその石切場の所在が確認されていなかった。そのような中、第1章で述べたように、築城史研究会により、本市龍間の車谷において「㊂」や「〇〇」、「#」、「♀」等の符号が刻まれた刻印石、矢穴石の存在が確認され⁽¹¹⁾、これが、大阪府下における徳川大坂城関連石切場の最初の発見例となっている。

第3節 刻印と矢穴について

採石地である石切場において確認されている刻印は、天下普請に参加した大名が石の所有権を明確に示すための符号であるとされている。これは、使用先の大坂城石垣においても確認されている。

現在、大坂城の石垣は、堀により水面下に隠れているものも含めて、約 100 万個の石材からなると推定されており、石垣に刻まれた刻印は、約 200 種に大別され、細別すると、1000 種を超えるとされている。藤井重夫氏は、織豊期から江戸期にかけて行われた、築城普請、天下普請に属する上木工事の石材に施された刻印（符号）の持つ意味を 23 種に分類し⁽¹²⁾、大坂城石垣の刻印（符号）の中から普請大名との関係を明らかにされている。したがって、刻印と諸大名の関係が明らかになれば、石切場において、



第3図 D区露岩窪地部分・(矢穴)石分布状況 ($S=1/1,000$)

穴と矢穴痕は区別すべきであるが、本報告では総称して「矢穴」としており、本報告でいう矢穴幅は矢穴長辺の長さを示している。

矢穴は、時代によって大きさ、形状に特徴があるとされ、徳川大坂城再築時の元和・寛永年間では、矢穴幅8~12cm、深さ6~10cmが一般的で、それ以降となると矢穴幅は短小化し、深さは幅を上まわる傾向があるが、近世中頃以降となると、さらに矢穴幅は4~5cmと縮小し、深さは6cm程度になるとされている⁽³⁾。このように、石切場にある石に残された矢穴の大きさで、ある程度の時期を確定することが可能となっている。

第3章 調査成果

既述のように、本遺跡内では昭和62年(1987)に発掘調査を実施しており、既にA~Cの調査区を設定している。今回はこれを踏襲する形で、各調査区にDからFのアルファベットを付した。すなわち調査名T S Q 90-1その1をD区、T S Q 90-1その2をE区とし、T S Q 92-1は調査対象地全体をF区とし、その中に複数のトレンチを設定したので、それぞれのトレンチに番号を付した。

第1節 T S Q 90-1 その1(D区)の調査(第3図)

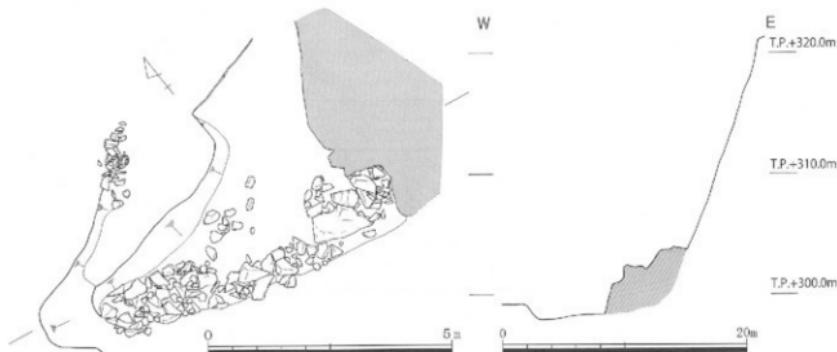
D区は標高約300~325mを測る丘陵北西斜面にあった露岩とその前面の窪地部分、そこから南西へ約70mの北西斜面に分布する矢穴石を含む石を対象に調査を実施した。

露岩及び窪地部分(第4図: 図版一)

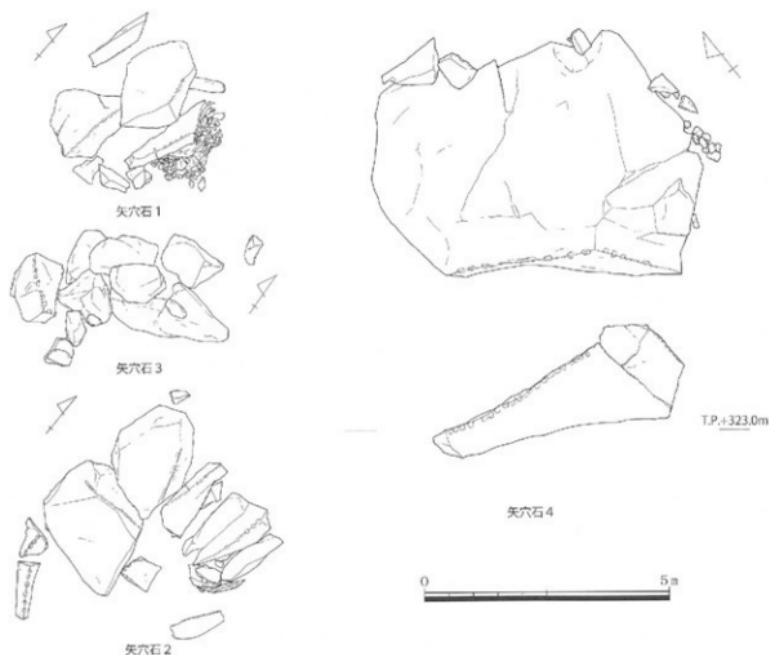
露岩は高低差約20mを測り、西向きに開口する「コ」字形を呈し、その前面は約20m²の窪地となっていた。窪地部分は黄褐色土の山土が厚さ約1mで堆積しており、それを除去すると、底面は花崗岩質の岩盤で、上部の露岩と一体を成していた。底面は上部の約3分の2程度の広さで、大小の石が集積し

どの藩が関わっていたかがわかる。刻印と大名の関係については、まだ解明すべき点が多いが、それでも、石切場にどの藩が関与していたかを推定する根拠の一つとなっている。

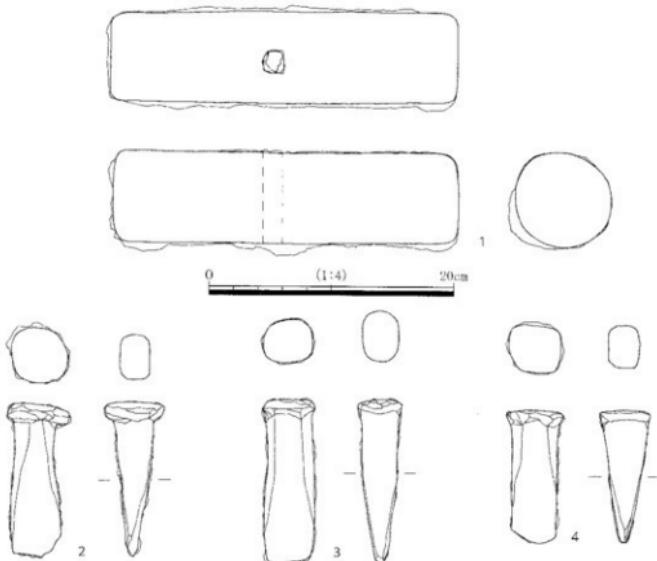
矢穴は、石を割るために穿たれた穴で、長方形の穴を直線に配して連続して彫り、そこに鉄製の楔を入れ、打撃を与えることで石を割る。この楔形の道具を「矢」と呼んでいる。この方法により2分割された石には、両方の石に矢穴痕が連続して残る。厳密にいようと矢穴幅は矢穴長辺の長さを示している。



第4図 D区露岩窪地部分東西平面図 (S=1/100)・断面図 (S=1/400)



第5図 D区矢穴石平面・立面図 (S=1/100)



第6図 D区出土遺物実測図

て検出された。露岩には幅約5cm、深さ6cmを測る矢穴が残る部分があり、約90×120×60cm単位の石材が切り出されていたものと推定される。これらの状況から、当初は露岩の上部から下部に向かって採石が行われ、ある程度進んだ段階で側面へと拡張され、さらに前方からも採石が行われた結果、最終的に露岩が「コ」の字状に残ったものと推定され、底面で検出された石の集積は、採石の過程で生じた割石が集められたものと考えられる。

矢穴石（第5図：図版二）

北西斜面に約20×40mの範囲で、矢穴石1～3を含む多数の石が分布していたが、矢穴石4だけが、上方の標高323m付近に離れて存在していた。矢穴は幅10～11cm、深さ6～8cmを測る。矢穴石4は約5mの大きさがあり、矢穴のある南西面に、径8.5cmを測る「○」の刻印が施されていた。

遺物（第6図：第2表：図版十八）

産地部分からゲンノウ（玄翁）や矢等の鉄製品が出土している。何れも、採石時に使用される道具である。

ゲンノウ（1）は矢を石に打ち込む時に使用するもので、柄を差し込むための1辺が約2cmの方形の孔がある。矢（2～4）は頭部の断面が構丸方形で、先端は平刃状を呈している。特に2は、打撃により頭部が変形している。矢の刃部幅は、3.9～4.5cmを測り、露岩に残されていた矢穴の幅に近似する。

小結

露岩に残されていた矢穴幅は、約5cmと小さめで、近世中期以降のものであるが、斜面に残る矢穴石1～4の矢穴幅は10cmを超えており、徳川大坂城再築時のものと推定され、当地はその石切場であったと考えられる。



第7図 E区石積み・(矢穴)石分布状況 ($S=1/1,000$)

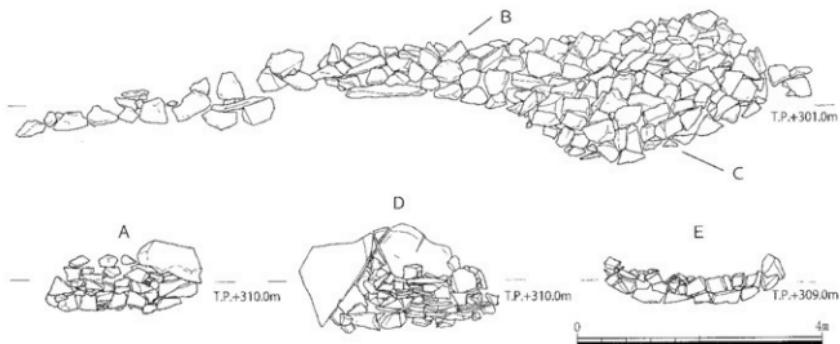
り、北西から南東方向に積まれている。これらの石積みの用途についても不明である。

矢穴石 (図版三・四)

南西斜面に多くの石が分布していたが、その中で矢穴が確認された石は4個であった。矢穴幅12~13cm、深さ7~9cmを測った。

遺物 (第9図: 第2表: 図版十八)

石の周囲の堆積土中から、近世初頭の上師器皿(5・6)、上師器羽釜(8~10)の他、奈良時代の須恵器杯蓋(7)が出土している。



第8図 E区石積み立面図 ($S=1/80$)

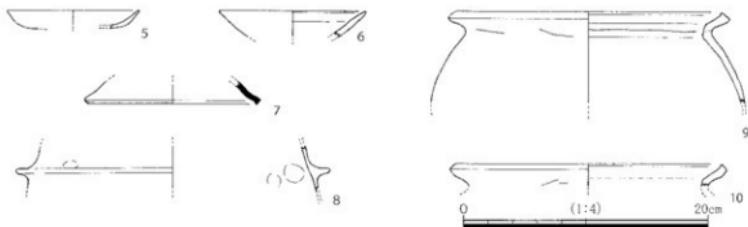
第2節 T S Q 90 -1 その2 (E区) の調査 (第7図)

標高約295~314mを測る南西斜面に分布する石積み、矢穴石を対象に調査を実施した。

石積み (第8図: 図版三)

調査地の上部斜面で、南西に開口する「U」字形に掘り込まれた箇所があり、石積みAはその北西壁、石積みDは南東壁、石積みEは開口部でそれぞれ検出された。人為的な構造物であるが、石の切り出しとの関連、用途については不明である。

石積みB・Cはそこから下方へ18mの地点にあ



第9図 E区出土遺物実測図

小結

石積みは用途が不明であるが、近世から近代のものと推定される。また、矢穴石1～4の矢穴幅は、12～13cmと大型であったことから、当地は徳川大坂城再築時の石切場であったと考えられる。

第3節 T S Q 92-1 (F区) の調査 (第10図)

標高約240～275mの南斜面において、「足立」の文字が刻まれた石柱、矢穴石が点在していたが、トレンチ調査により、焼土坑や石列の他、新たな矢穴石が検出された。

「足立」石柱 (第17図: 第1表: 図版六)

石柱①～⑯と抜き取り痕⑰が確認された。石柱①～⑯・⑯は、ほぼ北東から南西方向に並び石柱列を成すが、⑯は③から南西約11mの地点で、抜き取り痕⑰は⑯から南東へ約17mの地点で検出された。石柱列の間隔は約2.5～10mを測る。石柱のすべての東面に「西足立」「○○・足立」「西足立方由」「足」等の刻印や文字が刻まれていた他、側面や背面に幅8～11cmの矢穴が残るものもあった。

矢穴石 (第14・15・16図)

右1・2・8・10・11・12・20・24に矢穴が認められた。矢穴幅は9～12cm、深さは6～8cmを測った。

焼土坑 (第11・13図: 図版八～十二・十四)

調査地内で6基検出している。トレンチ2で検出した焼土坑1・2には鉄滓が残っていた。

土坑 (第13図: 図版十)

2基検出している。SK-1は 0.5×0.5 mの隅丸方形、SK-2は 0.4×0.5 mの長円形を呈し、深さはそれぞれ約0.3mを測る。埋土は暗褐色土で、遺物は出土していない。

石列 (第11図: 図版八)

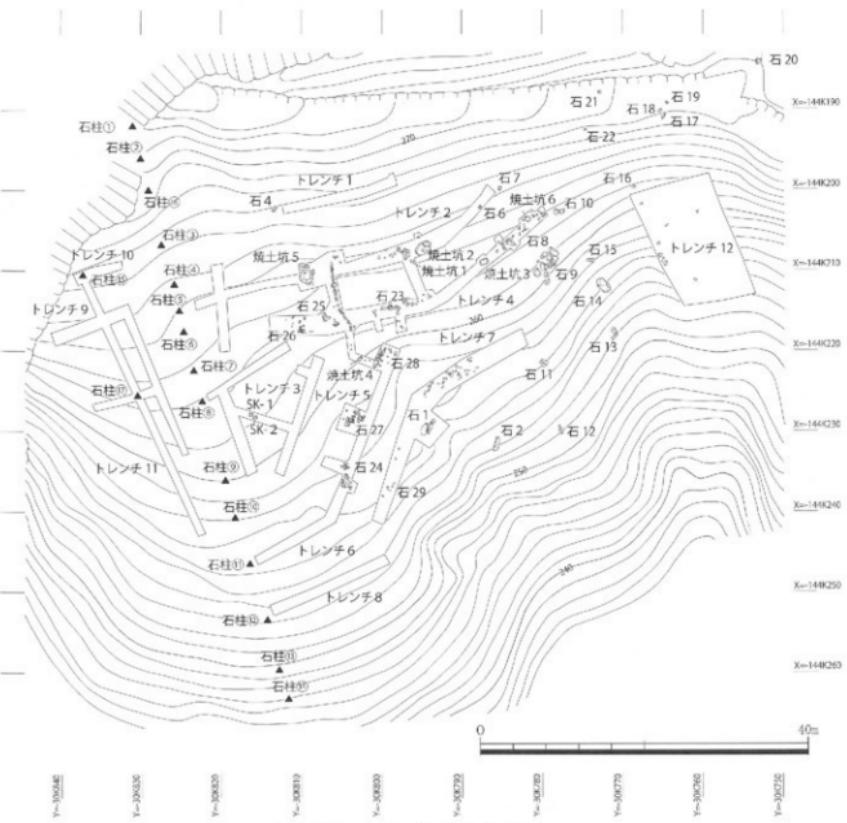
トレンチ2から4にかけて検出した。北西から南東方向に平石が整然と並べてあった。延長約13mを測り、両端はそれで終わっている。用途は不明である。

遺物 (第18図: 第2表: 図版十九)

近世初頭の陶器(11・12・14・16・17)や瓦質土器(15)が出土した他、須恵器(18)、鉄製クサビ(13)、砥石(19・22)、サスカイト剥片(20・23・24)、銅錢「聖宋元宝」(21)が出土している。

小結

出土遺物の年代や矢穴幅から、当地は徳川大坂城再築時の石切場であったと考えられる。焼土坑には焚火の痕跡程度のものもあるが、鉄滓が残るものは小鍛冶の跡の可能性も考えられる。また、「足立」の石柱は、並び方と文字の内容から、土地の境界を示す境界石と考えられる。

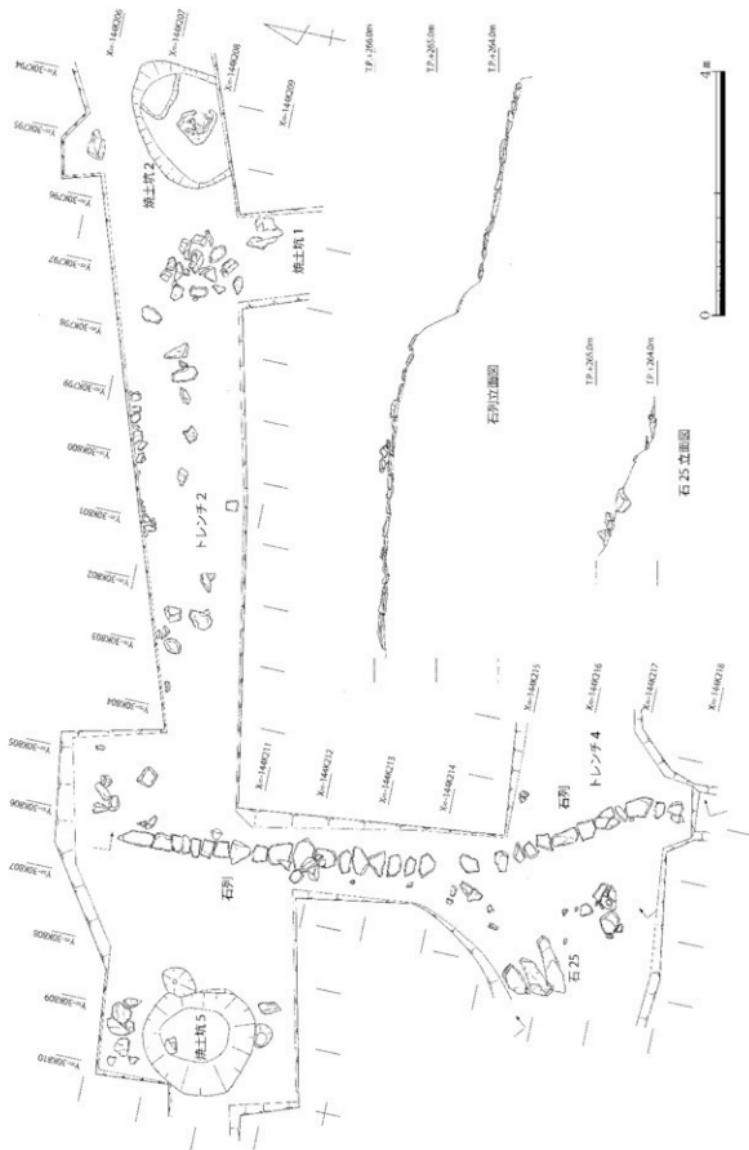


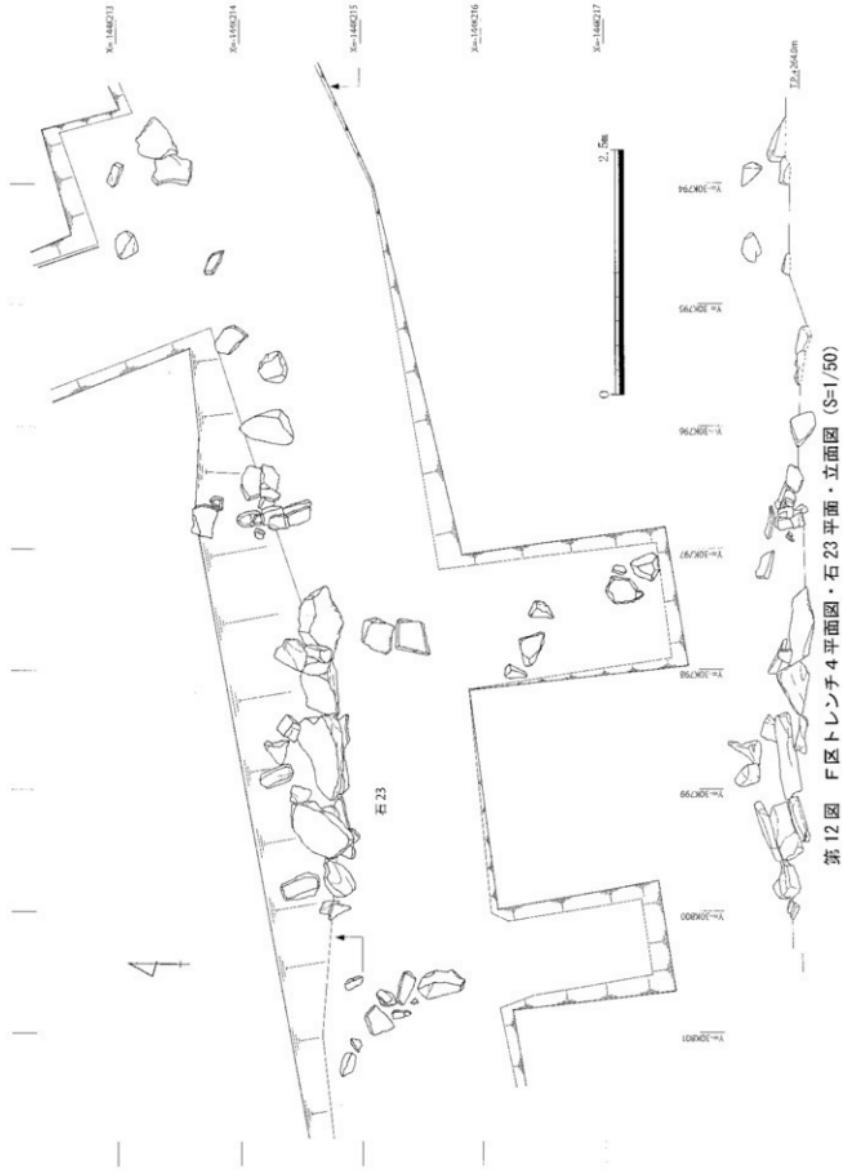
第10図 F区全体図 ($S=1/600$)

第4章 まとめ

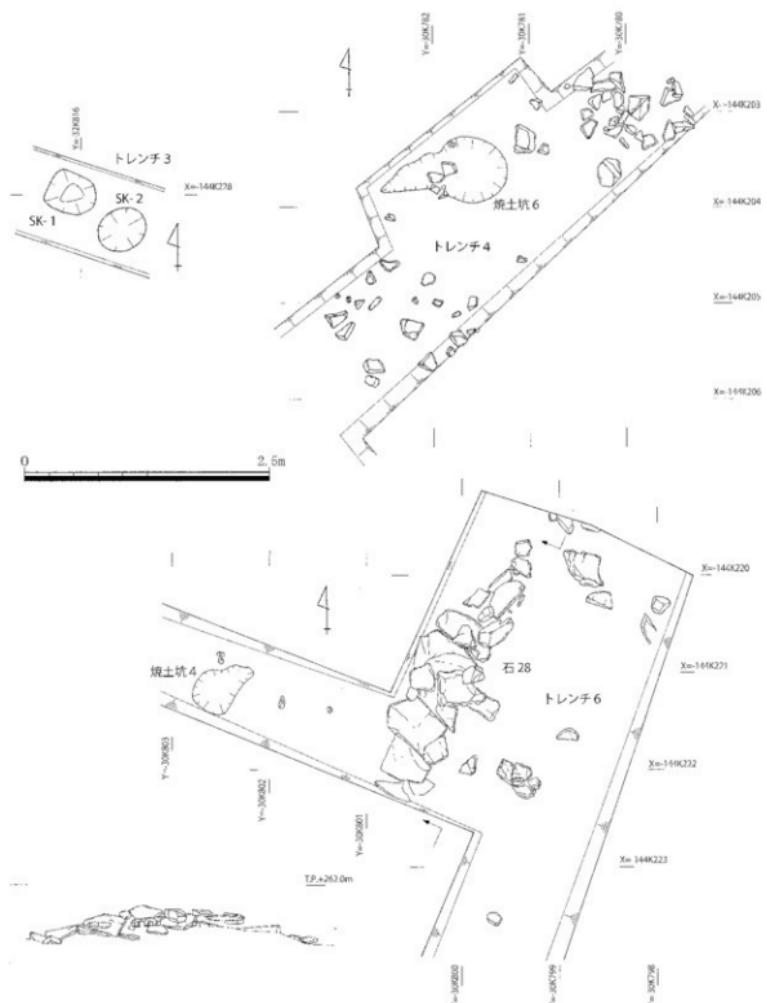
調査の結果、D・E・F区の何れも、徳川大坂城再築時の石切場であったことが確認された。3地区とも斜面を下ると、藤井重夫氏ら築城史研究会によって「 \oplus 」の刻印石、矢穴石が確認⁹⁹されている車谷へ至ることから、切り出された石の麓までの運搬は、同じルートで行われたと考えられる。ところで、F区で発見された「足立」の境界石であるが、「足立」は蘿の善根寺（東大阪市）に居を構えた足立家のことである。「足立家千代のしるべ」¹⁰⁰によると、足立家は、元は尾張の出で、織田信長に仕えていたが、豊臣秀吉の大坂城築城の際、石奉行に任せられ善根寺に移り住んだという。続く徳川大坂城再築の際にも、石奉行として、切り出した石を、工事を請負った諸藩へ供給していたとされている¹⁰¹。足立家の家紋は輪違い「 $\bigcirc\bigcirc$ 」で、車谷の刻印石には「 \oplus 」と「 $\bigcirc\bigcirc$ 」が1つの石に刻印（併刻）されているものがある。分銅「 \oplus 」は、松江藩堀尾家のものとされている。また、境界石に刻まれていた「足立方由」は「足立家先祖書」¹⁰²によると、亨保年間に当主であった足立註藏方由のことである。この頃が足立家の最も隆盛を極めた時期とされており、蘿だけでなく山間部にも広大な領地を所有していたことが明らかとなる。

第11図 F区トレンチ2・4平面図・石列・石25平面・立面図 (S=1/80)

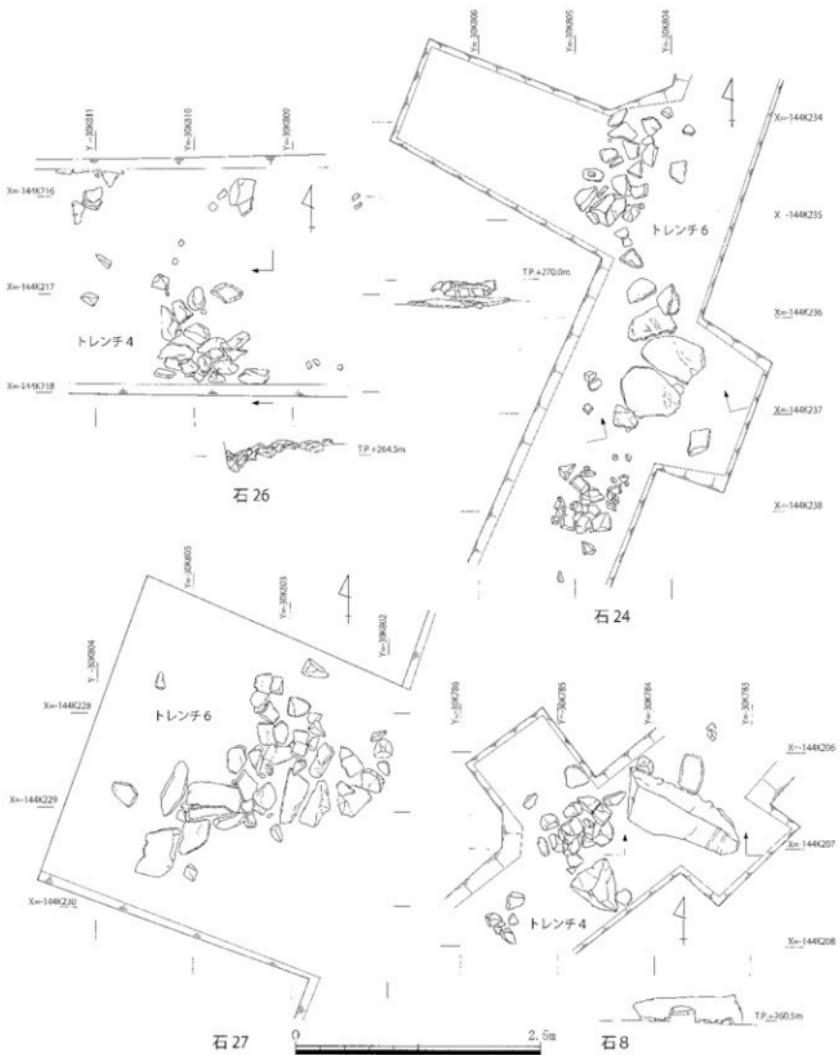




第12図 F区トレーナー4平面図・石23平面・立面図 (S=1/50)

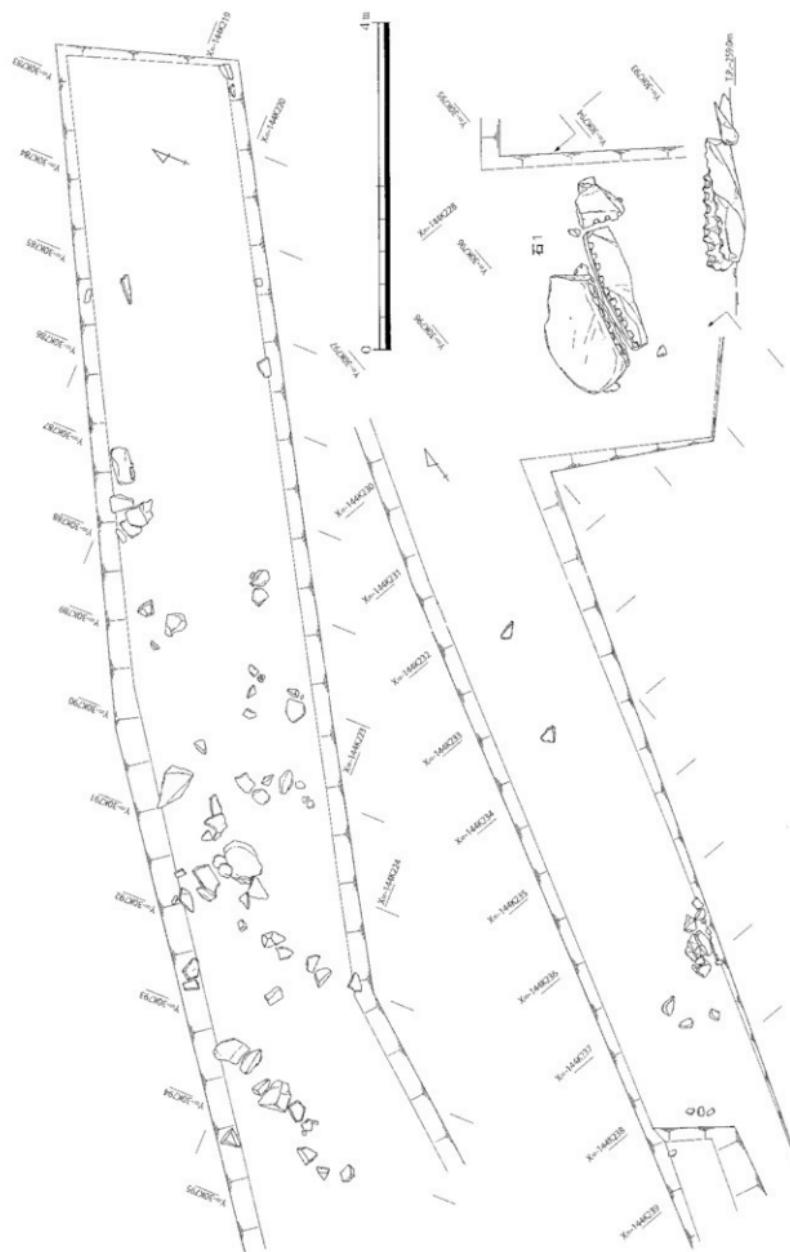


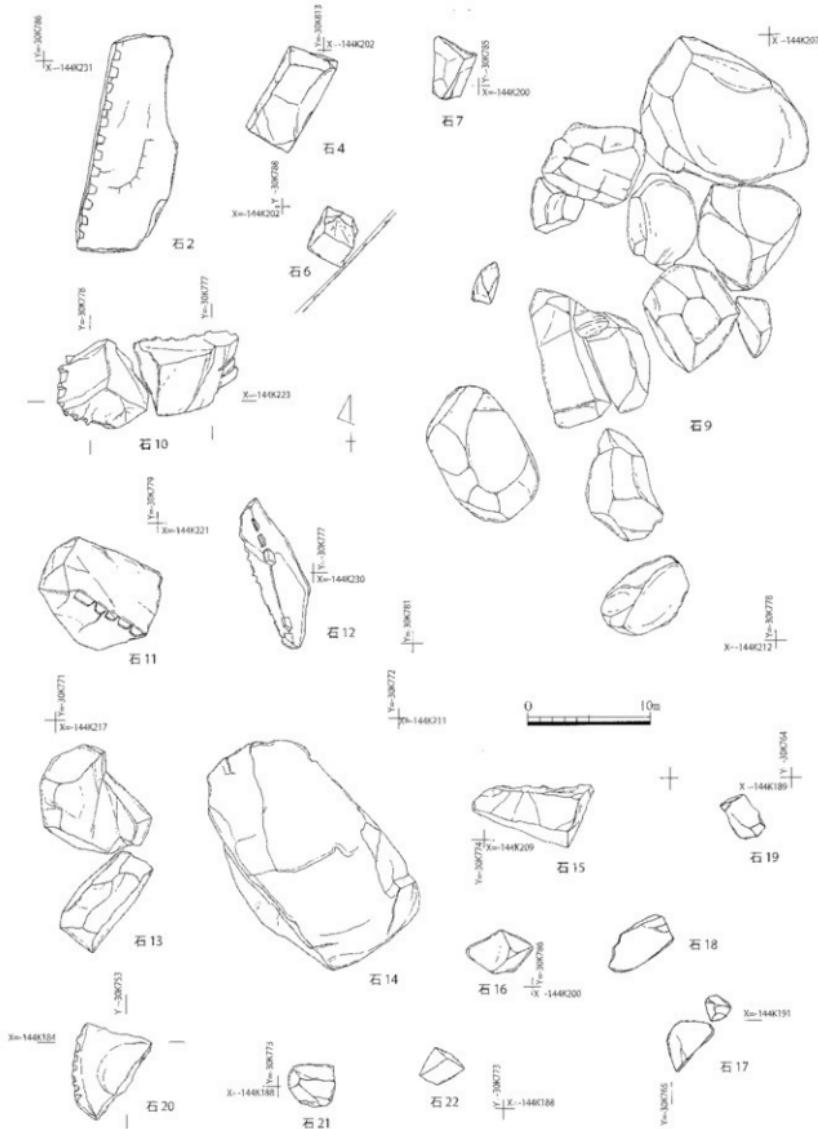
第13図 F区 SK-1・2・焼土坑3・4平面図・石28平面・立面図 (S=1/50)



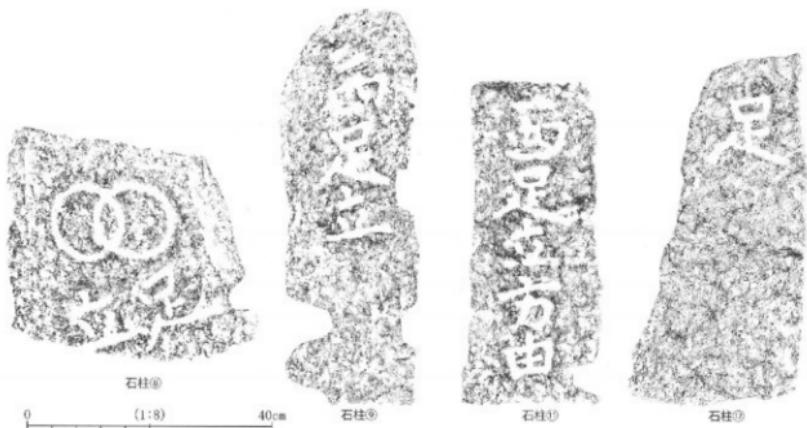
第14図 F区石8・24・26・27平面・立面図 (S=1/50)

第15図 F区トレンチ7平面図・石1平面・立面図 (S=1/60)

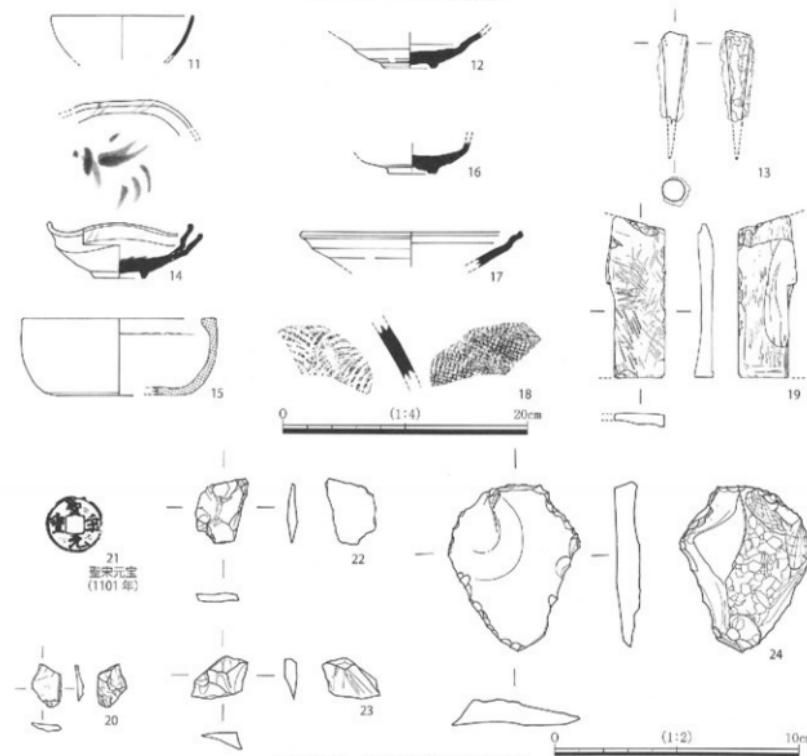




第16図 F区石2・4・6・7・9~22平面図 (S=1/40)



第17図 F区石柱拓影



第18図 F区出土遺物実測図

第1表 F区「足立」石柱法量表 (単位: cm)

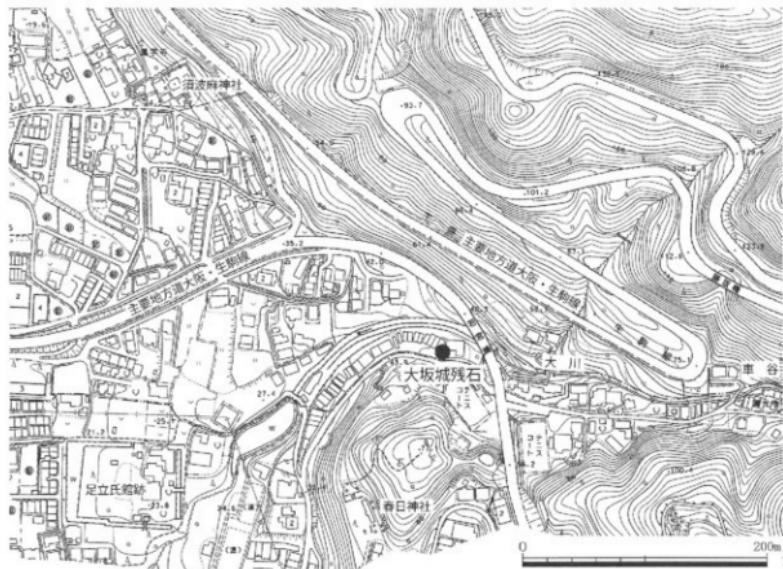
番号	刻印の種類	高 (地表から)	幅 (上辺・下辺)	奥行 (上部・下部)	備考 【「は矢穴の方向・数字は矢穴の大きさ (幅×深さ)を表す】
①	足	55	18・23	16・18	
②	足	50	18・18	13・13	前面左→右 (5.0 × 3.0) が 24.0 の間隔、 右側面前→後 (5.0 × 3.0) が 23.0 の間隔
③	西足	60	21・21	7・7	右側面前→後 (5.0 × 5.0)
④	足	20	23・23	16・16	
⑤	足	42	22・22	13・16	
⑥	西足立	43	22・22	16・16	左側面後→前 (11.0 × 10.0) が 3ヶ連続する
⑦	足	36	22・22	18・18	前面右→左 (4.0 × 4.5) 右側面前→後 (12.0 × 10.0) が 4ヶ連続する
⑧	○○・足立	37	32・41	18・18	左輪が小さい左径 11.0 右径 12.0、4.0 の重なり
⑨	西足立	70	23・23	23・30	
⑩	○○	30	30・25	22・20	左輪が小さい左径 10.0 右径 11.0、3.5 の重なり
⑪	西足立方由	55	21・21	13・17	背面右→左 (11.0 × 9.0) が 2ヶ連続する
⑫	足	60	16・30	8・18	左側面後→前 (5.5 × 4.0) 背面右→左 (5.5 × 3.0)
⑬	足	50	25・25	14・14	前面後→前 (10.0 × 7.5) 右側面後→前 (5.6 × 6.0)
⑭	足	40	30・25	15・14	右側面下→下 (5.0 × 4.5) が 2ヶ連続する
⑮	西足立	55	24・30	13・21	前面右→右 (6.5 × 6.0)
⑯	足	79	17・20	6・25	右側面後→前 (6.0 × 6.0) が 22.0 の間隔
⑰	(抜き取り旗)	—	—	—	30 × 30

なった。したがって境界石はこの訃聞の時代に設置されたものと考えるのが妥当であり、元和・寛永年間の大坂城再築当時の石切場と年代差があること、しかも、石切場は境界石より東側にあるため、直接的な関連は薄いと考えられる。

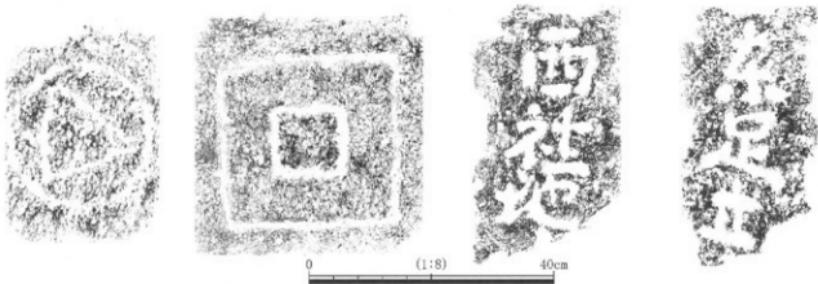
今回の調査で確認された刻印は、D区の矢穴石4に刻まれていた「○」のみで、これは加賀藩前田家の複数ある刻印のうちの一つと推定されているものである。今回3箇所の調査区で確認された石切場に、どの藩が関与していたのか確証を得ないが、車谷の石切場で確認されている刻印は、「◎」の他に「○」があり、藤井重夫氏は「○」は「茶の実」で、前田家の普請奉行であった長九郎左衛門のものに比定し、そのことから当地域では、前田家の関与が強かった¹²⁾のではないかと推定されている。

今回の調査は、生駒山系においては、築城史研究会が発見して以来の、徳川大坂城再築関連の右切場の発見であり、発掘調査としては、大阪府下では最初の事例ではないかと考えている。また、今回の調査結果は、車谷に面する斜面や、そこから分かれる谷の奥にも未発見の石切場が存在している可能性を示唆するものである。

紙数の関係で、各調査区の詳細な報告ができなかつたが、これを嚆矢として、生駒山系における徳川大坂城再築時の石切場についての研究が進むことを期待したい。



第19図 大坂城残石位置図 (S=1/4,000)



第20図 大坂城残石刻印拓影

第5章 中垣内1丁目所在「大坂城残石」について（第19図）

ここでは、本報告の関連資料として、東大阪市善根寺町6丁目と接する中垣内1丁目所在の大坂城残石について紹介する。

大坂城残石（のこりいし）、或いは残念石と呼ばれるこの巨石は、大坂城の石垣に使用するため切り出された石が、大坂城まで運ばれないまま現地に残されたことで付けられた名称である。現地での状況から、この石自体は上流から運ばれて来たものではなく、元々この地に所在していたものと考えられ、一旦は石の切り出しを試みたが、切り出されずに終わり現状に至ったものであろう。この石の北側には大川が流れ、この上流が本書で報告している石切場（T S Q 90-1・92-1 調査区）や昭和58年に築城史研究会によって発見された刻印石、矢穴石が分布する石切場が所在する車谷であり、龍から各石切

場へ向かうちょうど入りにあたる場所である。

石の大きさは周囲約 24 m、高さ約 3.5 m を測り、第 20 図と図版二十で示すように、石の上部には幅 11 ~ 13 cm、深さ約 8 cm の矢穴列が残る他、「○」「回」「〇」の刻印を見ることができる。これまでの刻印と諸大名との関連についての諸研究から「○」は津山藩森家、「回」は加賀藩前田家、「〇」は長州藩毛利家のものとされている。また、「〇」のすぐ横には、「くずし字で、「守る人しまやいし」との文字が刻まれている。「る」は「さ」のくずし字、次の「人」は「ハ」であると考えると、「寺さハしま やいしは」と読むことが可能で、「寺さハしま」は普請大名の一人、唐津藩主寺澤志摩守廣高のことを意味し、続く「や」は「矢」、「いし」は「石場」を表しているものと考えられるが、このように長州藩、唐津藩の異なる藩の刻印が並列する意味については、検討が必要である。また、石の東面には、「西社地」「東足立」の文字が刻まれている。「西社地」は南方 130 m にある春日神社の社地を意味し、「足立」は石の切り出しに関与していた足立家のことで、足立家の領地と春日神社地の境界を示すものであるが、これは元和・寛永年間の石の切り出しとの関連性は薄く、後世になって彫り込まれたものと考えられ、その根拠として、文字がある石の表面は、明らかに他の面より風化が進んでいない、T S Q 92-1 (F 区) で確認された境界石「西足立」の字体とよく似ている、さらにその境界石が設置された時期は、前章でも記述したように、享保年間の足立註藏方由の時代と考えられるからである。

このように、この石には元和・寛永年間の築城時の矢穴や刻印と享保年間のものが混在している。当初はこの石を切り出そうとしたが、何らかの理由で取り止めになり、途中からは石切場への入口を示すランドマーク的なものに変化して、当地域に石材を求めて来ていた諸藩の刻印が施され、今日まで残ったのではないかと推定される。

註

- (1) 藤井重夫『揖津大坂城（七）一生駒山系の石切場について—』1983 日本古城友の会
- (2) 大東市埋蔵文化財調査報告第 3 集『大東市埋蔵文化財発掘調査概報 1987 年度』1989 大東市教育委員会
- (3) 大東市指定文化財第 3 号「右造地蔵菩薩立像（延徳銘地蔵）」
- (4) 註 (1) と同じ。
- (5) 註 (1) と同じ。
- (6) 藤井重夫「大坂城石垣符号について」『日本城郭史研究叢書 8 大坂城の諸研究』岡本良一編 1982 名著出版
- (7) 森岡秀人・藤川祐作「矢穴の型式学」『古代学研究第 120 号森浩一先生隼寿記念論文集』2008 古代学研究会
- (8) 註 (1) と同じ。
- (9) 「足立家千代のしるべ」『枚岡市史第四卷 史料編二』1966 枚岡市役所
- (10) 豊臣大坂城築城時に足立又助昌成が、徳川大坂城再築時はその子仁兵衛宗佐が任せられている。
- (11) 「足立家先祖書（二）」（御承認願）『枚岡市史第四卷 史料編二』1966 枚岡市役所
- (12) 註 (1) 同じ。

第2表 出土遺物観察表

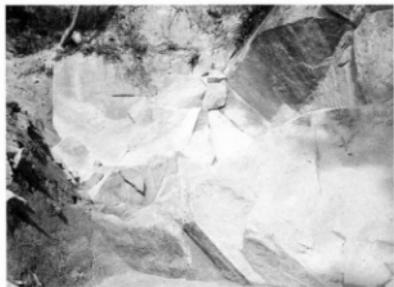
報告番号	出土地点	種類	器種	計測値(cm)	形態	技法	胎土	色調	現存率・備考
1	D区	金属製品	小皿	長さ: 28.4 幅: 7.4 厚さ: 7.5 重量: 9600.0g	円柱状を呈する。	-	-	-	丸形 16世紀末～17世紀初頭 か
2	D区	金属製品	くさび	長さ: 12.6 幅: 4.5 厚さ: 2.7 重量: 600.0g	V字形。	-	-	-	丸形 16世紀末～17世紀初頭 か
3	D区	金属製品	くさび	長さ: 13.3 幅: 3.9 厚さ: 3.0 重量: 700.0g	V字形。	-	-	-	丸形 16世紀末～17世紀初頭 か
4	D区	金属製品	くさび	長さ: 10.9 幅: 4.2 厚さ: 2.4 重量: 600.0g	V字形。	-	-	-	丸形 16世紀末～17世紀初頭 か
5	E区	土師器	小皿	口径: (10.7) 器高: (1.3) 底径: -	口縁部は体部から直線的に伸びる。口縁端部はやや尖り気味。	内: ナデ 外: ナデ	器	内・外: 10YR8/4 淡 黄褐色	口縁部10%以下 16世紀末～17世紀初頭
6	E区	土師器	小皿	口径: (11.9) 器高: (2.1) 底径: -	口縁部は体部から直線的に伸びる。口縁端部はやや尖り気味。	内: ナデ 外: ナデ	器	内・外: 10YR8/4 淡 黄褐色	口縁部10%以下 16世紀末～17世紀初頭
7	R区	須彌器	杯	口径: - 器高: (1.6) 底径: (13.8)	口縁部は外方に伸びる。口縁端部は内側にやや尖る。	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	器	内・外: 2.5Y5/1 淡 黄色	底部10%以下 良質時代
8	E区	土師器	羽釜	口径: (10.7) 器高: (3.3) 底径: -	口縁部先端は丸く収まる。	内: 指オニのち ナデ 外: ナデ	器	内・外: 10YR7/4 淡 い黄褐色	体部10%以下 内側に黒い付着 人形 16世紀末～17世紀初頭
9	E区	土師器	羽釜	口径: (22.9) 器高: (7.7) 底径: -	体前は丸みをもつ。口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部は面をもつ。	内: ナデ 外: ナデ	器	内・外: 10YR7/4 淡 い黄褐色	口縁部20% 16世紀末～17世紀初頭
10	E区	土師器	羽釜	口径: (11.9) 器高: (1.9) 底径: -	口縁部は外反し、口縁端部は面をもつ。	内: ナデ 外: ナデ	器	内・外: 10YR7/4 淡 い黄褐色	口縁部10%以下 大型 16世紀末～17世紀初頭
11	F区 シンチ 2	瓦質陶器	碗	口径: (11.5) 器高: (1.6) 底径: -	体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は丸く収まる。	内: 薩利 外: 施釉	器	2.5Y7/3 淡黄色	口縁部20% 燒き窯 16世紀末～17世紀初頭
12	F区 シンチ 6, 右27	瓦質陶器	皿	口径: - 器高: (2.9) 底径: 4.2	削り出し高台。内側に胎土目が2箇所残る。	内: 施釉 外: 施釉、回転ヘラケズリ	器	2.5Y7/4 淡黄色 輪: 2.5Y6/2 淡黄色	底部30% 16世紀末～17世紀初頭
13	F区 シンチ 6, 右24 周辺	金属製品	くさび	長さ: (7.5) 幅: (1.9) 厚さ: (1.8) 重量: 52.99g	V字形。	-	-	-	70% 16世紀末～17世紀初頭 か
14	F区 シンチ 7	国産陶器	皿	口径: (11.8) 器高: (4.6) 底径: 4.2	削り出し高台。内面に胎土目が1箇所残る。口縁部は焼けたせた形状。口縁端部は内側に凹屈する。	内: 施釉 外: 施釉、回転ヘラケズリ	器	7.5YR7/6 楕褐色 輪: 10YR5/2 右黄褐色	40% 内面に文様あり 焼成跡 16世紀末～17世紀初頭
15	F区 シンチ 7	瓦質土器	鉢	口径: (16.9) 器高: (2.2) 底径: (9.8)	鉢部は中央がわざかに隆む。体部は内凹する。口縁端部を内側へ引き出しつつ、幅のある平坦な面をもつ。	内: 指オニのち ナデ 外: ナデ	器	内: 2.5Y4/1 黄褐色 外: N4/灰褐色	30% 16世紀末～17世紀初頭
16	F区 シンチ 7	国産陶器	皿	口径: - 器高: (3.9) 底径: -	削り出し高台。内面に胎土目が3箇所ある。	内: 施釉 外: 施釉、回転ヘラケズリ	器	10YR7/3～7/4 淡 い黄褐色	底部完形 16世紀末～17世紀初頭
17	F区 シンチ 7	国産附脚	皿	口径: (18.0) 器高: (2.9) 底径: -	口縁部は外反し、口縁端部は構造式を呈する。	内: 施釉 外: 施釉	器	6Y5/3 淡オリーブ 黄褐色	口縁部10% 16世紀末～17世紀初頭
18	F区 刻印石1	須彌器	裏	口径: - 器高: (4.4) 底径: -	体部破片。	内: 圆心円状の当 て具板 外: 格子目タタキ	器	内: 2.5Y7/3 淡黄色 外: 2.5Y5/1 淡灰褐色	部底
19	F区 刻印石7	石製品	硃石	長さ: 13.3 幅: 4.8 厚さ: 0.8 重量: 134.37g	長方形。使用面2面。左側面が欠損。	-	-	-	破片 研磨使用 16世紀末～17世紀初頭 か
20	F区 シンチ 4	石製品	石剣	長さ: 1.8 幅: 1.2 厚さ: 0.3 重量: 2.16g	剣片。	-	-	-	完形
21	F区 台24	珊瑚	碧朱元寶	長さ: 2.3 幅: 1.76g	-	-	-	-	ほぼ光形 初期1101年(北宋)
22	F区 シンチ 7	石製品	硃石	長さ: 2.7 幅: 2.2 厚さ: 0.4 重量: 4.83g	破片。使用面1面。	-	-	-	破片
23	F区 シンチ 3	石製品	石剣	長さ: 1.8 幅: 2.3 厚さ: 0.5 重量: 2.51g	剣片。	-	-	-	光形
24	F区 シンチ 11	石製品	石剣	長さ: 6.8 幅: 5.4 厚さ: 0.8 重量: 39.22g	剣片。	-	-	-	完形



作業状況（西より）



露岩（西より）



露岩（西より）



露岩採石痕（西より）



露岩壅地部分（西より）



北西斜面石分布状況（南東より）



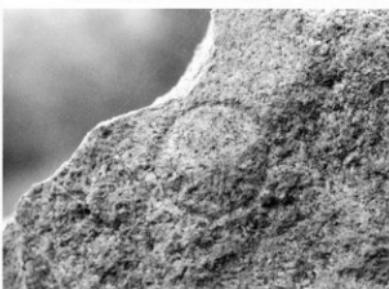
北西斜面矢穴石 1（西より）



露岩南側南西斜面矢穴石 4（南西より）



北西斜面矢穴石 2（西より）



露岩南側南西斜面矢穴石 4 刻印（南西より）



石積み A・D 全景（北西より）



石積み D（北より）



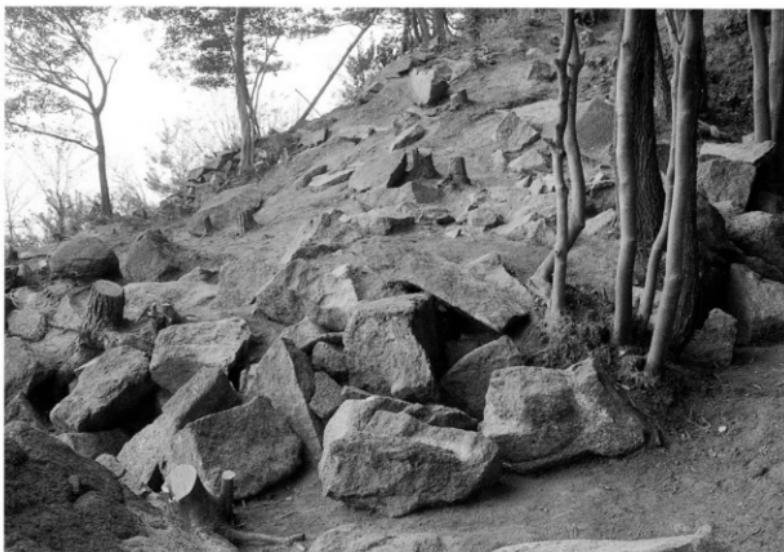
矢穴石 1（南西より）



石積み E（南西より）



矢穴石 2（南西より）



南西斜面石分布状況（南より）



石積みB・C（南西より）



矢穴石3（東より）



矢穴石4（南より）



矢穴石3（北東より）

調査前全景（東より）



調査前全景（東より）



調査地より
車谷を隔てて
生駒山頂を望む
(北より)





トレンチ2 (東より)



トレンチ2
(南西より)



トレンチ2 (西より)





トレンチ2 石列
(北より)



トレンチ2 石列
(南より)



トレンチ2
焼土坑1・2
(北西より)

トレンチ2 焼土坑1
(北西より)



トレンチ2 焼土坑1
(南より)



トレンチ2 焼土坑5
(南より)





トレンチ3（北より）



トレンチ3（西より）



トレンチ3 SK-1・2掘削前（南より）



トレンチ3 SK-1・2（南東より）

トレンチ4 (西より)



トレンチ4 石23
(西より)



トレンチ4
焼土坑3・石8
(南西より)





トレンチ4 石25・石列（北より）



トレンチ4 石8（北東より）



トレンチ4 焼土坑3（西より）



トレンチ4 石26（北より）



トレンチ4 焼土坑6（南より）

図版十三 TSQ92-1(F区)

トレンチ6
(南西より)



トレンチ6 石24
(南より)



トレンチ6 石24
「聖宋元宝」
出土状況 (東より)





トレンチ6 石27
(北より)



トレンチ6 石28
(南東より)



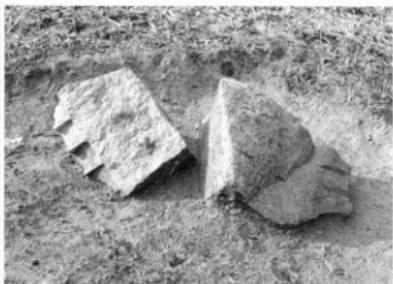
トレンチ6
焼土坑4・石28
(南東より)



トレンチ9 石柱⑪抜き取り痕（北東より）



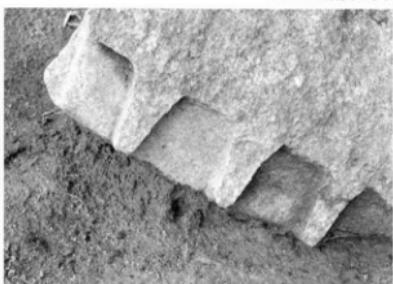
トレンチ7 石1（南東より）



石10（南より）



トレンチ7 石1矢穴（南東より）



石10矢穴（南西より）



石2（北東より）



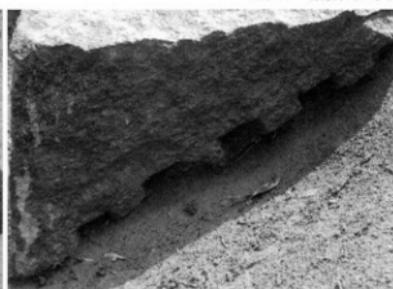
石11（南西より）



石15（南東より）



石11矢穴（南西より）



石15矢穴（東より）



トレンチ 11 (北西より)



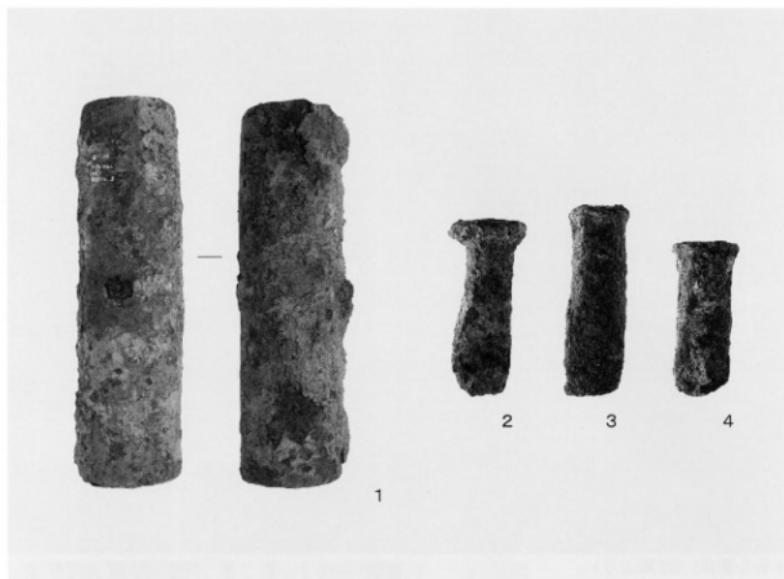
トレンチ 11 (南東より)



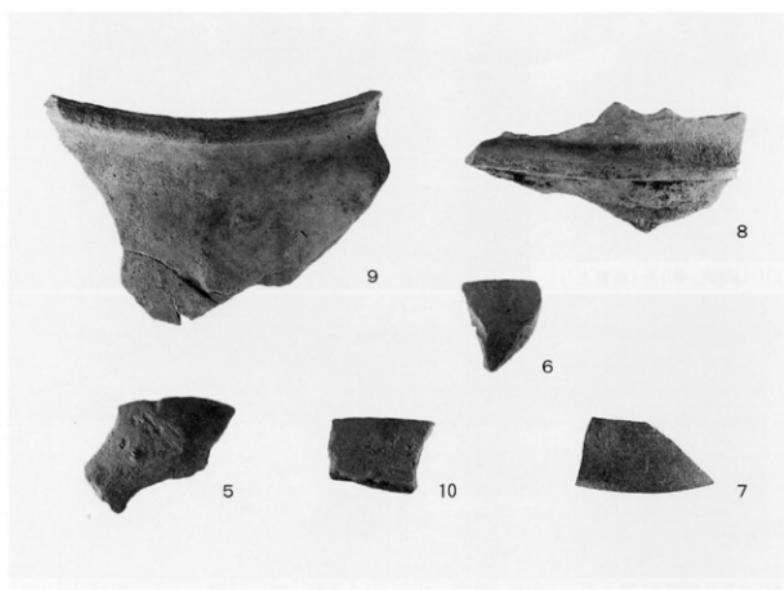
トレンチ 11 サヌカイト剥片 (南東より)



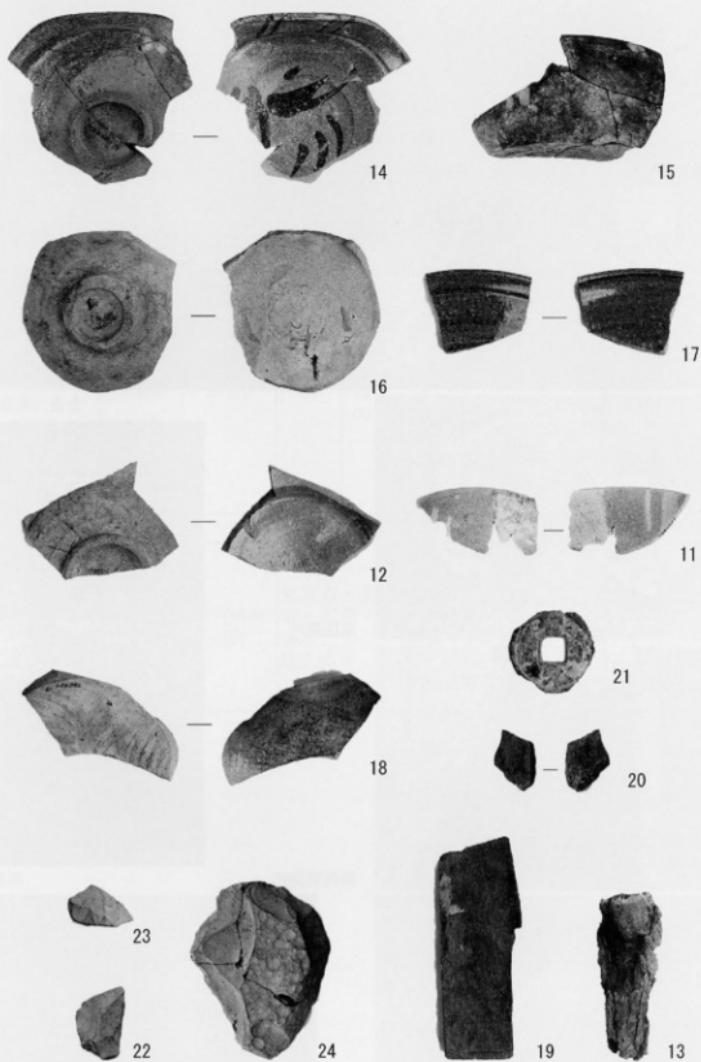
トレンチ 12 (北より)



D区出土遺物



E区出土遺物



F区出土遺物

圖版二十一 大坂城殘石



全景（南東より）



東面刻印



南西面刻印



南面刻印



東面刻印



上面矢穴

報告書抄録

ふりがな	いしきりばあとはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	石切場跡発掘調査報告書							
副書名	徳川大坂城再築工事関連の石切場跡調査							
巻次								
シリーズ名	大東市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第32集							
編著者名	黒田 淳							
編集機関	大東市教育委員会							
所在地	〒 574-0076 大阪府大東市曙町4番6号 TEL 072-870-9105							
発行年月日	2012年(平成24年)11月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
いしきりばあとは 石切場跡 T S Q 90 - 1 (その1) (その2)	大阪府 大東市 龍間	27218	43	34° 42' 00"	135° 40' 07"	1990年10月15日 ～11月2日 1990年11月5日 ～12月5日	354,184 m ²	ゴルフ場 改修工事
T S Q 92 - 1						1992年3月19日 ～5月15日	8,603 m ²	スポーツ 施設新設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
石切場跡 T S Q 90 - 1 T S Q 92 - 1	石切場	江戸時代 近代	矢穴石・境界 石・石列・石 積み 焼土坑	サヌカイト剥片 須恵器・土師器 陶器・矢 玄翁(ゲンノウ) 硯・砥石 銅錢(聖宋元宝)			元和・寛永年間の徳 川大坂城再築にかか わる石切場跡。関与 した足立氏を示す境 界石。	

大東市埋蔵文化財調査報告第 32 集
石切場跡発掘調査報告書
—徳川大阪城再築工事関連の石切場跡調査—

2012 年 11 月 30 日発行

編集・発行 大東市教育委員会
〒 574-0076 大東市躍町 4 番 6 号
TEL. 072-870-9105

印刷・製本 株式会社 地域文化財研究所
〒 578-0941 東大阪市岩田町 1 丁目 17 番 9 号
TEL. 072-968-7321
